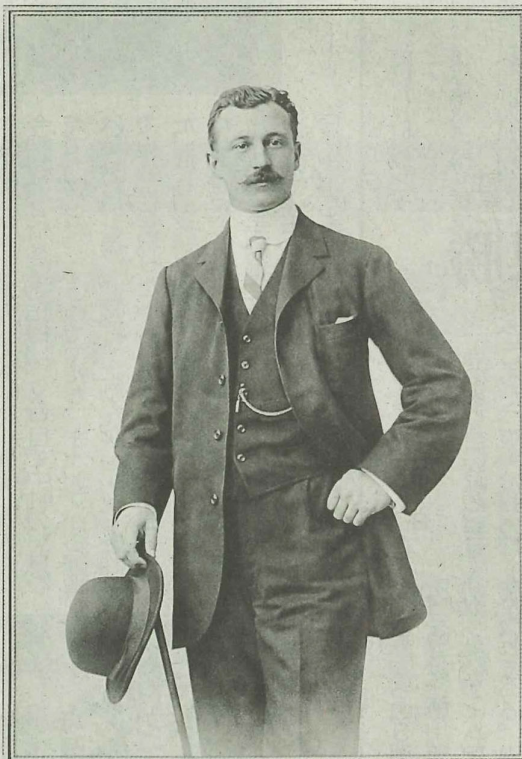


bunka@nagasaki-np.co.jp

成功収めたユダヤ人豪商一家

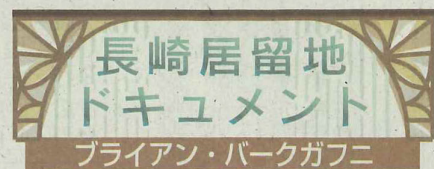


Atelier Relies
Joh. Alfred Lohmann

BERLIN, G.
Oranien Str. 135
Eing.ing. Richardstrasse Haus 511

ベルリンの写真館で撮影されたパシー・アブラモビッチ・レスナーの写真(レイン・アーンズ氏提供)

ユダヤ人豪商のジグムンド・レスナーは、現在のルーマニアとウクライナの国境にまたがるブコヴィナに生まれ、若いうちにオーストリアの国籍を取得した。明治17(1884)年に両親と共に来崎した彼は、梅香崎で雑貨店を開業した。当時、多くのユダヤ人が長崎居留地の大浦や梅香崎地区に定住し、酒場経営や仕立屋などの職業に就いていた。



32

レスナーの養子

来崎から3年後、レスナーは同じユダヤ人のソフィ・フォイアーと結婚。2人は子供に恵まれなかったが、明治26(1893)年に異例

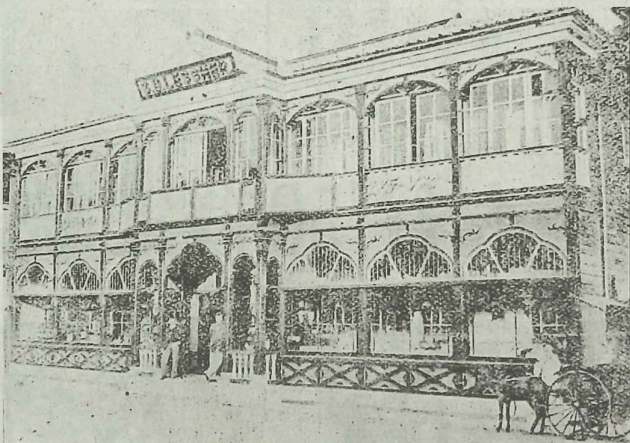


パシーが青年時代を過ごした南手の大邸宅(筆者撮影)

の状況で息子を養子に迎えた。上海から来た日本人女性3人のヨーロッパ系幼児を連れてくることを知り、そのうちの1人がユダヤ人らしいという噂を耳にしたレスナーは、女性と幼児たちを長崎で見つけ警察に

梅香崎で大型商店経営

梅香崎6番地にあったS・D・レスナー商會の商店は長崎における百貨店の先駆けとなった(月刊誌「チェリー・フロサム」の広告より)



通報した。その後、この女性3人が子供たちを不法にかくまっていたことが判明し、子供たちは保護された。長崎地裁は、親を捜す間、レスナーがユダヤ人の男児を1年間扶養することを認め、翌年、親族が現れなかった。レスナー夫妻はこの子を養子にし、パシー・アブラモビッチと名付けて長崎で育てることにした。

レスナーの商売はその後、順調で、明治末期には梅香崎の商店に加え、オークション業や不動産業を営み成功を収めた。明治38(1905)年に梅香崎6番地で新築した大型商店は、ロンドンの有名百貨店にちなんで「ホワイトリズ・オブ・ナガサキ」と呼ばれるほど、輸入雑貨や食品、衣服などの品ぞろえが豊富だった。同じころ、レスナー家は多くの裕福なイギリスユダヤ人女性と結婚し、大正6(1917)年にヒルダという娘をもうけた。一方、養父のジグムンドはオーストリア国籍を持っていたため、第1次世界大戦中、敵国民とみなされ大きな挫折を味わう。心臓病を患っていた彼は、大正9(1920)年に長崎で他界して坂本国際墓地のユダヤ人墓域に埋葬された。享年62。

夫の死後、ソフィは財産を処分して日本を離れ、上海に住むパシーの下に身を寄せた。一家のその後の消息は不明である。

(グラフバー園名譽園長)

月1回掲載します